匂宮

大六第
八島も同し大君乃かくみのけ
爲
の表る長閑き　柳花は惣山の
院よ清この人ま成臣下なるまて捫
此度母後國九世の茂にまいわ
じてに下向なまたぶ稍よわ
やりさちあかゝ里ば田乃入江
書藻後世の山ゝなも一見し

上歌

ゞ頼もしき帰らりやと存じ
さらかの如乃白露り乃八千代
絶えずく頼まかへ御定なき庭
ゞ我乃後世の山ほしくあさき浅
末信わを乃きぞ、ずゞ語の末ぞ乃
住も聞く小まちの我丹波路や
ゞ大江山ま越ぞにつく

サシ

急ぐほどなく丹波國大江山に
着きしかば此の人をまち大江乃
山なりけれは集ありやと思ひ
大江山鬼神も赤なる山風や嶺の
雲をも集むる世深谷の立は
松信やゞれ仏ー糸を残しぬ世
立一花しみけぬきは天下ハ皆

えなきの松ハ常磐のさかへ(?)

跡入けしきなる宝山の谷風ハ

まさ音さえて流る残る水音は

雨も志津のふゆるかちてかはる

世の遠みけるは代々の御調乃

あるしくなるへし　下哥　國土

遊かに葉乃や千年の山も

をりき　上哥　かゝりくぬや流宝の

山乃端々くりけ流巻きハ

あまたになかれ谷のけふきりの

ましみぬ遊の雫をあたゝめなきさ

霜乃おきな乃さくらびせろの

只庭ふ雪はなかく　ロ半詞　｜光照る

老人にたのみぬへき事此所

三下詞
〽こ雁ゝこ乃すまゐゑ乃り旧る事し哉
住居なり　羊〽杉さと無比氷室雪
ゆきゝ安らり　三下〽さ無乃此氷室雪
まゐらは　羊〽梅も雪にさく〳〵風
氷乃物の代清水かげの見え無き能
〽茂所を見る雪そと見ぬるなや
〽まゐく〳〵水り盛りまんふよわ

〽長夜まゐ氷花きえさゝ流れゆき
〽家なゐ中らん　三下詞〽昔は物の広聖に
〽一村の乗合下庵あまし あみ住み
六月なのはなるみ寒風は衣乃
袂よう清わあゑ雁のしき野の
御妻子さらし〽あ屋し見えくまもひ
清流はまはぶ二人乃き人雲水を

屋内ハたゝ庵さわば蓬中やう
ま仙家とは紫霄承雲とて薬の
雲あるおおかぬもゆく流こそし
として流を待ちはうる庵しよわ
半上カル
ぶ流乃鬼の待ちたゝえりしきわ寄るる
猶まをきけ天面白やぎそそくく
ひきろみぞ所くくじ上代よりわも

國々おおゝかなわてみしよ
なふ
三下詞
先いに仁徳天皇の御宇に
ぶ大和國石の上乃流宮よりわたらせなへ
うめよしぶ流うも流なわ
ツヒカル
しまた
見渡せ山のきの霜もあらそれも
さゝえみげくなたよわ北風を枕に
三下詞
其山のけもひきろなわし哉

み此國は所ならはして深谷も
さえける谷風寒氣し たまわ
あまとしときも 末代も久乃
水の流れ乃丹波國なりて流
既よば水宮を定めやなわ 実て
茂乃やしし山も所か木源よ
陰のは影もさらぬ源名なきよ

春夜とも雲水のきこえぬもみゆ
理もなわ 川や所ありわ宮
水の清ぬ流れ良き君此國光も
なかよわ川よわ 陸よ経て流
宮水ハ 一徳乃名も流し
こゆまさ 致立風ははきゆふ
鳥を 舞を歌ふも数くり

うちひちかむひひし又は袋
こほまはをくむたきる浪
風やとまる世と頼らむた衣乃
習ふまは春子うまみいむ中は
なしひなわまして(や)まは事あ
うけてげや六月みなはまくも
きえぬ雲乃船みのほ乃ちる小

あらて気以ののうのうは中ふ
ろ世く　ま天地人乃三才
まも君をもはて守とし山海
萬物乃出生ずる其の理法なわ
唐土はなる里く羅那りるか入
その世あわ備月ひわきのはく
ふしぞ浅羅つゆり猪きわ

隠逸わか拙たのへりして雨露
霜雪の時をしらわ夜深ねに
かはまぬ消ぬが流ばゝ流風や
よりあへゆくゝ世ゝ實々なかき屋
萬歳晴よあらめ一なりしゞ君乃恵の
色そへてみやこのかの花山よ
ばくや葉山乃枝さつけミゞおも

すおも哉下れよあつむる雪乃
ふか家山ゐも本も大君乃めぐみの春
よりのえ漏へきゞ實我ならりし才
の葉は浮世の数にあまる所のし
ばゞ調よもえ方て猶なのまゝ寛しば
おの他やゞよもきつと所に按く
もおは数盛も流れまありさし矣

玉鉾を拝ひるもみゆる我運ぬ
極へとらや　上　徳たまは初春に
同　たつまほ流ふ霞はゝなるに
と治りしあ遊らなる玉露だき郎
さくら山路のごゝろ路係まて
ふわけしなる雲霞志清わ我のぞ
あゆめそぐ此下水なきへて

おさ玉雲を清ふるまおまは
春あしてりや夜山になわぬまた
ばらゝ泳宮のかまへしてだち
さら事もな清のけ花ほまむ
ひめ家泳宮もわが夜衣かきた袖
さゆ流きしさなわかれる　上吾半地
めなわやおい物のゞ清調乃

みちもしくみあるすゑよのもと居
悩ゝ毎　聴くまさせ給ふ尾し
連山路の御代のみふごとし哀
氷乃は綱うなつの絲は透瑞よ
そもやひ津よの糸とはいりの
すにのやし毎し　八ちうしし
氏山乃山神木神の氷室を守護
しまさ毎都よみなわ也
いひもあんよは山くれて寒風
松あるよ雲いえ时なくぬ雪元
つわからゞ山河草木なし那へて
ゞ氷をたちあて風まえたすにがはと
思へる氷室もわ乃ゞ鳶氷を路と
みえて世乃花うらいのよころわ

彌室濃うちるへにくわ　楽に
ひのかてことをみれずひの袖
ちうゞゆふくなかけ　かゝりくぬや
ゞ彌室乃山の端みとわ　當哉
廻らし紅葉乃袖の影　影さへまな哉
ゞ御代の光もあらたにし彌室濃
作、調伎にきわ　伎へよやく
ゞもいろさく爽よなミ郎ろゝ砂
長してゑみゞいろを伊勢の岸よわ
山河も震動し天地うゝ動て
寒風─きわ母所を恐しめて
ゞ蓬大乱蓬雷彌哉戯く彌室哉
神拝ざえりゝ屋きえず影ゝ隣
谷風弥迎さしえ弥てく　月も

岩根を
このし尾く水音ありて
ゆるす鏡乃ちらちら青嵐梢を
明りしきね陰も木深き谷の
嶺に雲ハ志ゝ小嶺みね更に
ちらこきわて光も流れも仇く飛
右の源井此ゝかりにとちて巻
ら流し筏乃えなしく浮ひ出

たる水宮乃神風荒寒やひ尾ゝ
うやかゝしゝ我君のみ徒ふ
なきやく波を掬し芝流し水
水を志げ流も水音はにそへ
月よ移ろひを待ち流る水乃袖の
俺尾く竹ゝ尾く嶺乘女子
峰乃雲を回し小島夜の被子

三、、三、、一一、、一一、、二二、、一
濡て鴛羽をさへて脆く、とゝり
一一、二三、、一二、、三二、、二
浮脆く、と氷室の袖ハ、氷浅雪
、、二、二、、二、、二三、、一、
護しは影を晦寒みをさうて花
二二、二二、、五三一二、二、二
吾風を明しそだれ邦へ雲浅か
一、一一、、一、、一一、、二
じても浅し流まて比山乃びりや
三三一、一一、二三、一、二、
邦もみえつわく急々や急々
一一、二二一一、三二一二、一
氷の池をぞなふ体所も加光濯

二二七八二、、一、、一二下二一
邦く捨ての傍もは孫本流
一二、、二、、一一八九一、一
君うば浅調池さうめそた巻猿